



## ドナウの真珠 ブダペストに暮らして

ブダペスト日本人学校教頭 佐藤明彦

### \* マジャール人とマジャール語

こちらに赴任する前、ハンガリーに対しての知識は非常に乏しいものだった。

そもそも、「HUNGARY」の「HUN」とはアジア系のフン人のことだとずっと思っていた。ハンガリーはフンガリアのことだと勝手に解釈していたのだ。

確かにフン人はかつてこの地にやって来ていた。しかし現在のハンガリー人との直接の結びつきは考えられない、というのが定説だ。

ハンガリーの人たちは自国のことを「マジャールオルサーグ」と呼ぶ。「マジャール人の国」という意味である。9世紀にウラル山脈周辺から黒海沿岸を經由して移住してきたアジア系遊牧民が先祖らしい。

源はアジア系ということで、マジャール人の話すマジャール語は、ヨーロッパの中では特異な言語だ。つまり、いわゆるラテン語系・ゲルマン語系・スラブ語系のどれにも属さない。そのため、日常使う単語も共通性はほとんど見られないし、文法でもヨーロッパ系の言語との違いが数多く見られる。

私はとりあえずマジャール語を習っているのだが、遅々として上達はしない。もちろん能力も努力も足りないのだが、英語などと共通する単語がほとんどないというのも正直言ってつらい。まさに外国人泣かせの言語と言えよう。(ワインやビールに該当するマジャール語はすぐに覚えられたのだが……。)

さて、アジア系の人々が先祖というのは、名前の標記の仕方からも推察できる。ハンガリーの人の名前は、日本と同じ姓・名の順なのだ。たとえば、この国が生んだ有名な作曲家フランツ・リストも正式なハンガリー式の標記に従えば、リスト・フェレンツとなる。

### \* 世界を変えた大事件

こちらに来て間もない頃、「汎ヨーロッパ・ピクニック」という言葉を聞いた。

はじめは何のことも見当がつかなかった。しかし、そのことを知るに従い、この国が現代史においてとても大きく大きな役割を果たしたことがわかった。

1989年の夏、ハンガリー西部の街ショブロンで「汎ヨーロッパ・ピクニック」という政治集会が開かれた。その集会には当時の西ドイツへの亡命を考えている約1000人の東ドイツ人が参加していた。

集会で東西両陣営の人々が交流し、その時に東ドイツの人々をオーストリアに脱出させてしまおうというのがこの集会の計画であったのだが、ハンガリー政府はこの集会のことを黙認していた。いやそれどころか、内々に後押しするように画策していたのだ。そのためこの参加者は何の妨害も受けずに国境を越え、オーストリアへの脱出に成功した。

その後、ハンガリー政府は東ドイツ人のオーストリア脱出を公式に認め、このことがきっかけとなって、同年秋のベルリンの壁崩壊へとつながっていくのだ。

当時の政府首脳は勇気、決断には目を見張るものがあるが、その背景には、この国の苦難の歴史があったのかもしれない。

この国は、ヨーロッパ中央部の宿命か、幾多の受難の歴史をくぐり抜けてきた。

13世紀のモンゴルの侵略、オスマン帝国やハプスブルク家の支配、戦後のソ連の圧政とハンガリー動乱等々……。第一次世界大戦後のトリアノン条約のように、領土の実に72%を失い、全人口の半数が国外に取り残されるなどという過酷なことも経験しているのだ。

そのせいか、ハンガリー人は自分たちの言語や文化あるいは自国の歴史に対する思いが強い。また、それを守り続けてきたという自負も感じる。

私のような外国人が、たどたどしくもマジャール語を話そうとすると、とても嬉しそうな表情をする人が多いのも、その表れなのかもしれない。

### \* 親日的な人々

私が勤務しているブダペスト日本人学校は、大河ドナウの西岸ブダ地区の公立小学校の敷地内にある。そのため、休み時間ともなると、校庭では日本の子どもとハンガリーの子どもが入り交じって遊んでいる。授業や行事を通じての交流も盛んだ。

\*日本語では、マジャール人、マジャール語と表記するのが一般的だが、ここでは現地語の音に近いマジャール人、マジャール語と表記した。



国会議事堂とドナウ川



クリスマス市



ハンガリー名物 グヤーシュスープ

本校は2005年の開校で、今年で開校3年目の新しい学校である。07年の12月現在で、児童生徒数91名。在籍数はわずか3年で約3倍になっている。児童生徒数が減少している学校が多いヨーロッパの日本人学校の中では、珍しい学校と言えるだろう。

ハンガリーの在留邦人は現在約1200名であり、日系企業の進出により、この数は今後更に増加傾向が予想されている。それと共に本校の児童生徒数も増えるのではないかと考えている。

さて、地元校のことに目を向けてみよう。地元校の子どもたちから、時としてうれしい挨拶をされることがある。それは、「こんにちは！」などの日本語の挨拶だ。

実は、この地元校には選択の授業の中に日本語のコースもあり、場合によっては小学校2年生から日本語を学んでいるのだ。

ハンガリーでの日本語教育は、その人口に比較すると盛んであると言える。市内の幾つかの高校や大学には日本語専攻のコースがあるし、サークル活動レベルで日本語を学んでいる人も意外と多い。

11月に、PTA主催のバザーを行ったが、その時、日本の書籍、雑誌、まんがなどが瞬く間に売り切れてしまった。購入したのはほとんどがハンガリーの人々であった。

概して、ハンガリーには親日家が多い。多くの人が、日本の文化やテクノロジー、はたまた食事やアニメに至るまで、日本に強い関心と親しみを持っている。

ハンガリー在住15年のある人は、スキンヘッドとおぼしき人々に絡まれた時、彼が日本人であるということがわかった瞬間、「日本は好きだ！」と逆に歓迎されたなどという経験さえたそうだ。

普段生活している中で1度も不愉快な思いをしたこ

とがないが、それはこの人々が親日的なことが由来しているのかもしれない。

### \*急激な経済発展

こちらに来る前は、かつての共産国時代の印象が強く、あまり物はないのだろうと予想していた。

ところが、来てみて驚いた。街の至る所に24時間営業のコンビニエンスストアはあるし、スーパーもある。大型のショッピングセンターが何か所もあるし、郊外にできればアウトレットもある。街を少し歩けばそこに米国系のファーストフード店を見つけることもできる。

ただし、この状況は、ほんの数年前かららしい。つい10年前までは、スーパーもそこにある品数も少なく、たとえば冬の生野菜はわずか数種類しかないという状態だったとのことである。

1989年に体制転換して数年間は経済的に苦しい状態が続いたが、90年代後半から経済が好転して、外国資本が流入してきた。「東欧の優等生」と言われていた頃だ。それに2004年のEU加盟が追い風になり、現在の状態になってきているらしい。

ただし、それにつれてのインフレ傾向はいかんともしがたく、貧富の格差も広がっているようだ。

さらに2007年12月からシェンゲン協定に加わり、西ヨーロッパとの往来が容易になった。西ヨーロッパとの結びつきは益々強まるであろう。そのことによって更に物価高になるのではないかと懸念も生まれている。

この急激な変化が吉と出るか凶と出るか、それは誰にもわからない。

しかし、きっとどんな変化であろうと、ハンガリーの人々は大らかにそして力強く人生を謳歌していくに違いない。